ふるさと伝承回想法のススメ

世代間交流で
地域に活力を！

平成23年1月

NPOシルバー総合研究所

はじめに

超高齢化や核家族化が進み、都市においては高齢者のみの世帯の増加、地方では 65 才以上の高齢者が 50％を超え、近い将来消滅の危機にある「限界集落」の増加が社会現象となっています。

そのような状況下で、高齢者の孤立を防止するための方策が求められています。高齢者と子供世代の交流が、その一つの方策として考えられます。

一方で、子供世代は高齢者が生きてきた時代を知りません。また、高齢者が現在どのような想いを持って過ごしているかを知る機会も少なくなっています。そこで相互交流を促進するためには、互いの世代を理解するための機会が必要です。

シルバー総合研究所では、平成 20 年度から２年間、（財）長寿社会開発センターの助成を受け、高齢者と子供世代の交流促進を目的としたモデル事業を行いました。具体的には、世代間交流を促進するための教材ビデオを制作したり、モデル地区での回想法体験、交流会の開催等です。

このリーフレットは、これらの事業を行う中で開発された『ふるさと伝承回想法』や『ふるさと伝承交流会』の解説書となっています。この解説書は、これから世代間交流をやってみようと考えている行政や介護予防サービスの専門職や、博物館等の地域活動資源に携わる方々、また地域のボランティアや高齢者ご自身を読者として想定しています。

このリーフレットが、地域活性の一助となれば、関係者一同大変嬉しく思います。

最後に、事業やリーフレットの作成にご協力いただいた地域の高齢者や子供たち、行政や専門職、ボランティアの方々、委員や関係者の方々に心から感謝申し上げます。

平成 23 年 1 月

ＮＰＯシルバー総合研究所

目　次

１章　ふるさと伝承回想法とは…… 5
表　回想法の多様性とふるさと伝承回想法の位置づけ…… 8

２章　ふるさと伝承推進員の養成の考え方とすすめ方…… 11

３章　ふるさと伝承交流会の企画のすすめ方…… 15

４章　ふるさと伝承交流会の実施例…… 23

５章　まとめ…… 29

資料…… 33
ふるさと伝承交流会 書式フォーマット
ふるさと伝承交流会計画書①…… 35
ふるさと伝承交流会計画書②…… 36
ふるさと伝承交流会実施報告書…… 37

ふるさと伝承交流会計画書例
（１）Ａ老人クラブ・Ａ町社会福祉協議会・Ａ小学校 …… 38
（２）Ｂ市、Ｂ市社会福祉協議会、Ｂ-NPO …… 39
（３）Ｃ市ふるさと学習館 …… 40
（４）Ｄ市高年大学 交流ふれあい学科…… 41

ふるさと伝承推進員　任命書…… 42

著者紹介…… 44

1章 ふるさと伝承回想法とは

１章　ふるさと伝承回想法とは

（1）ふるさと伝承回想法とは？

「ふるさと伝承回想法」は、子どもを含めた若い世代と高齢者との交流を促し、ナチュラルな相互関係を育むことにより、福祉・教育・地域づくりなど多方面から、地域を活性化させる方法の一つです。世代間交流に「回想法」という仕組みを持ち込むことにより、発展的な活動につながっていきます。

その主軸となるのは、高齢者が持つ記憶という財産を次世代につないでいくことです。高齢者が、子どもの頃の遊び、家での役割（手伝いや作業など)、地域の年中行事や祭り、伝統などを次世代に伝える。その過程で高齢者は「回想法」による健康維持が見込まれるだけでなく社会的役割を担うこととなり、子どもたちは伝承学習を体験し、加えて互いに交流する機会を得ることができます。

今日では、数十年前と比較しても世代間の関係が希薄となり、地域力・地域教育力の低下が社会的な問題、懸案となっています。かつて当たり前のように存在していた世代間の関係を完全に復活させることは困難ですが、時代に即した関係作りとして、「ふるさと伝承回想法」が重要な役割を果たしていくと考えられます。

高齢者と子ども世代、子どもの親世代が互いに楽しみながら学び、一緒に活動することが「ふるさと伝承回想法」の基本であり、高齢者の生活暦に尊敬の念を抱きながら多世代間交流を進め、地域力を高めていくことが「ふるさと伝承回想法」のねらいです。

（2）ふるさと伝承回想法を始める前に「回想法」とは？

ふるさと伝承回想法を始める前に、「回想法」について理解を深める必要があります。

回想法は、昭和 38（1963）年アメリカのロバート．N．バトラーによって定義づけられました。高齢者が昔の懐かしい話や楽しい体験などを思い出すためのお手伝いをするものの一つです。

現在のような核家族化、少子化の中で、高齢者が次世代の方々と話をする機会が希薄になっています。そのような状況の中で、昔話をする、昔のことを思い出す機会を得ることで、心が温かく穏やかな気持ちになり、高齢者に役割や活力を与えることができます。

回想法には、治療的回想法と地域回想法があります。地域回想法には、介護予防を目的とした回想法、博物館や生涯学習や伝承活動を目的とした回想法があります。

次に掲げる表「回想法の多用性とふるさと伝承回想法の位置づけ」を参照いただくと、ふるさと伝承回想法の役割を知ることができます。

＜表＞　回想法の多様性とふるさと伝承回想法の位置づけ

	治療的回想法	地域回想法			
		介護予防を目的とした回想法の場合		ミュージアムにおける生涯学習を目的とした回想法の場合	ふるさと伝承回想法
		ハイリスクアプローチ	ポピュレーションアプローチ		
対象者	・認知症などさまざまな疾患や障害による何らかの解決すべき心理・社会的課題を抱えた高齢者 ・個別、あるいは４～８人程度の固定小集団	・地域在住の虚弱高齢者（特に閉じこもり、うつ、認知症のおそれのある高齢者） ・４～８人程度の固定小集団	・地域在住の高齢者 ・６～１０人程度の固定小集団 ・固定せず、いつ、誰が参加してもOKなオープンな集団 ・講座形式の大集団	・すべての一般市民 ・目的をもって訪れる来館者 ・目的をもたずに訪れる来館者 ・家族, 友人同士など集団 ・個人（独り）	・ふるさとを思う（潜在的にも）地域の高齢者、若者、子供世代 ・老人クラブ、高年大学、趣味やまちづくりなどのサークルに所属する高齢者、若者世代 ・限界集落と呼ばれる地域に住む高齢者、若者世代 ・小学校、学童保育、子ども会などの団体に所属する子供たち
目　的	・生活機能の改善 ・特に心理・社会的問題点の改善 ・生育歴や生活歴など個人因子のアセスメントの機会として	・介護予防のための生活機能の維持・向上 ・特に閉じこもり、うつ、認知症など心理・社会的リスクの改善 ・生きがいづくりなど、活動のきっかけや場の提供 ・健康に対する意識の啓発	・介護予防のための生活機能の維持・向上 ・生きがいづくりなど、活動のきっかけや場の提供 ・健康に対する意識の啓発 ・地域のリーダーとしての意識やボランティア意識の啓発 ・地域活動の育成・支援	・生涯学習 ・自己啓発 ・社会参加 ・レクリエーション ・ノスタルジーに浸る ・家族など集団としての親睦 ・回想法リーダーとしての情報収集など研鑽 ・さまざまな個人のニーズ	・ふるさと再発見 ・井戸端会議の復活 ・世代間交流 ・ふるさとや地域の有形無形の何かを世代を通して伝承すること ・ふるさと再生、地域の活性化、まちづくり
目　標	・個人の問題解決 ・個人の生活ニーズの達成 ＊心身機能改善の具体的な数値目標や生活ニーズを明確にしておくこと	・特定高齢者数の抑制 ・要支援・要介護認定高齢者の発生率の抑制 ・高齢者医療費、介護保険給付費の抑制	・特定高齢者、要支援・要介護認定高齢者の発生率の抑制 ・高齢者医療費、介護保険給付費の抑制 ・地域のリーダー育成 ・ネットワークづくり ・町づくり	・個人のニーズの達成 ・ミュージアム来館者の増加 ・ミュージアムに対する関心度・満足度・親近感の向上	・ふるさと伝承交流会の開催とその継続 ・ふるさと伝承推進員の養成と、その活躍の場を増やすこと ・子供たちの高齢者を見る目や意識が変わること
手　段	・グループ回想法 ・個人回想法	・グループ回想法	・グループ回想法 ・講座形式による講義や演習	・展示物の観覧 ・来館者の展示物に対する解説や回想 ・来館者の来館者（特に子ども）に向けた語り部体験 ・来館者の回想・語りの掲示 ・演劇体験 ・視聴覚教材の活用	・グループ回想法 ・ふるさとを意識できる回想のテーマを用いる（ふるさと自慢、ふるさとの家や遊び場・学校などの見取り図や絵を描いてみる、民俗・風習・季節の行事などの再現） ・ふるさと伝承交流会（子供世代、その親世代と高齢者の交流活動）

担当者	・セラピスト、各種専門職	・リーダー経験をもつ保健師、看護師、作業療法士、臨床心理士、介護福祉士などの専門職	・リーダー経験者 ・保健師などの専門職 ＊将来的には地域のボランティアが担当していくことが望ましい	・学芸員 ・市民ボランティア ・古老 ・語り部 ・その他コーディネーター	・ふるさと伝承推進員（老人クラブ、高年大学、趣味やまちづくりなどのサークルに所属する高齢者リーダー、民生委員、語り部となりうる高齢者など） ・高齢者と子供たちを結びつけるコーディネーター ・日常的に子供たちと接する団体職員や教育関係者、自治体職員など
技　法	・コミュニケーション技法、カウンセリング技法、集団療法などの各種治療操作を取り入れて介入を行う ＊セラピストが対象者や集団力動の変化に応じて臨機応変に対応	・リーダー、コ・リーダーは共に語り楽しむ姿勢でのぞむ ・楽しい回想を引き出し交流しやすい雰囲気をつくる ・集団になじめない、発言の乏しい参加者に配慮した座席の設定と、リーダー、コ・リーダーの介入	・リーダー、コ・リーダーは共に語り楽しむ姿勢でのぞむ ・楽しい回想を引き出し交流しやすい雰囲気をつくる ・個人情報の保護に関して配慮しつつ、語られた回想を地域で発表する機会や、冊子にまとめる活動を盛り込むよう助言する		・エンパワメント ・フィールドワーク ・インタープリテーション
時　間	・毎週１～２回、１時間、２～３か月、全１２～２４回程度 ＊頻度は対象者の適応レベルと目的、その他の治療やケアとの組み合わせを考慮して決定	・毎週１～２回、１時間、２～３か月、全８～１２回程度	・毎週１～２回、１時間、２～３か月､全８～１２回程度 ・隔週あるいは月１回程度で数回 ・単発の講座形式 ＊他の健康づくり・介護予防の啓発講座と組み合わせてもよい	・随時 ・参加型の場合は毎月定例開催により１～２時間	・グループ回想法を行う場合は１時間程度、定期的に数回 ・ふるさと伝承交流会を行う場合は子供たちの集中力と高齢者の耐久力に合わせて2時間から3時間程度
場　所	・病院や施設の専用あるいは兼用の治療室	・市町村保健センター、健康増進センター、老人福祉センター、公民館、利用可能な保育園や学校などの一室 ・インフォーマルな社会資源である民家など ・博物館とその展示コーナーのスペースあるいは小会議室 ・委託の場合の民間事業所など		・ミュージアム	・公民館や学校、ミュージアムなど利用可能な、ある程度人数を収容できる公共施設など
活用する社会資源	・回想を促すための古い道具など	・参加を誘う手段としての口コミや人間関係 ・広報誌やチラシ、ポスターなどによる広報媒体 ・回想を促すための地域の博物館とその収蔵物 ・リーダー、コ・リーダーとしてのマンパワー、あるいはそれを支援するNPO団体など ・将来的にリーダー、コ・リーダーを担うボランティアとしての個人、あるいはそれを支援するNPO団体など ・いきいきサロン、ミニデイサービスなど地域における既存のサービス資源 ・地域の潜在的社会資源の発掘や、開発を試みる		・ミュージアムの収蔵物そのもの ・民家や部屋の一部など移設展示空間 ・民家や部屋、小学校の教室などの模擬展示空間 ・語り部の語りそのもの ・映像資料	・地域の社会資源すべて ・子供向け教材（絵､写真､本､紙芝居やDVDなど） ・高齢者自身と個人が所有する昔懐かしい道具等、有形無形の民話、言い伝え、知恵など

評価・モニタリングの方法	・生活機能全般、特にうつ、認知機能、介護負担など心理・社会的問題点を中心としたアセスメントを事前事後で行う ・回想法グループ記録 ・回想法個人継続記録表（施設版・在宅版）	・生活機能全般、特に閉じこもり、うつ、認知機能、IADL、社会活動、QOLなど心理・社会的リスクを中心としたアセスメントを事前事後で行う ・回想法グループ記録 ・回想法個人継続記録表（在宅版）	・QOL指標などを用いたアセスメントを事前事後で行う ・参加しての満足度、感想を尋ねるアンケート調査 ・回想法グループ記録 ・回想法個人継続記録表（在宅版）	・アンケート調査 ・聞き取り ・自由記載ノート	・子供向け、その親世代向け、高齢者向けにそれぞれ作成したアンケート調査 ・インタビューや聞き取り ・ビデオ撮影 ・ふるさと伝承交流会実施報告書
展開・継続の方法	・グループ自体の継続や、個別に新たなグループ構成のもと継続参加が必要かどうか検討する ・回想法を通して語られた内容から、個別に新たなアクティビティへの参加を促す	・評価に基づき、継続か終了かを個別に検討する ・リスク因子をモニタリングしつつ、ポピュレーションアプローチへ移行 ・リスク因子が改善した後も何らかのフォローアップを検討する	・回想法の体験をきっかけとして、今後やってみたいこと、展望について尋ねてみる ・回想法を継続する場合は参加者がリーダーとなるよう促し、その運営を支援する ・回想法を継続しなくても自由、アクティビティの選択も変遷して構わないとし、集まりの場や機会の確保を支援する ・活動の継続や町づくりに向けた取り組みのリーダー意識をもってもらうため、例えば任命式などを最終回に盛り込む	・市民主体の自主企画の定例化 ・生涯学習講座の企画・開催 ・社会資源の組織的収集 ・映像資料の作成など	・回想法の体験をきっかけとして、子供たちや若い世代との交流を意識してもらうこと ・ふるさと伝承推進員や語り部の任命 ・ふるさと伝承交流会を通して、子供たちや若者世代と交流する ・ふるさと再生、まちづくりを目指したネットワーク作り ・子供たちが地域の高齢者から学んだふるさとの社会資源や知恵を生かした活動の機会とその拠点づくり。この循環を目指しすべての世代を支援する

2章 ふるさと伝承推進員の養成の考え方とすすめ方

２章　ふるさと伝承推進員の養成の考え方とすすめ方

（１）ふるさと伝承推進員とは

高齢者のなかには、暮らしている地域でかつて行われていた行事や風習、遊び、生業に関する事柄など、現代では消えてしまったり、薄らいでしまったりした様々な事象や歴史、民俗を記憶している方がいらっしゃいます。そうした記憶や記録を将来に伝承し、残していくことは、社会的、文化的に重要です。

ここでは、歴史調査、民俗調査といった学術的な伝承よりも、人が思い出として記憶している事柄という点に注目していきます。つまり、回想法という手段を用いて懐かしい話をし、その懐かしい話を伝承していくスタイルです。したがって、多くの高齢者が気軽に親しみを持って参加できる形が重要となります。

回想法を通して自身の思い出や記憶を語る、そして、それを次世代に伝えていく役割を担っていただく。その担い手が「ふるさと伝承推進員」です。

（２）養成のすすめ方（回想法体験）

楽しく思い出を語る機会として「回想法」は有効な手段です。特に､集団で語り合う「グループ回想法」と呼ばれる手法が適しています。

実際に回想法を体験してみましょう。回数は８回程度で、１回はおおむね 60 分～ 90 分くらいに設定します。主催者側からセッションに加わり、参加者の話に耳を傾け、テーマに沿って話をまとめるのがリーダーで、参加者の話をリーダーにつなげるのがコ・リーダーです。

その都度決めたテーマに沿って参加者が思い思いの話をすることにより、忘れていた出来事を思い出すケースも多々あります。「昔の懐かしい話をしてみませんか？」。最初は「話をすることなどないなあ」と消極的だった参加者が、いつの間にか積極的に話の輪に加わり、言葉だけではなく身体で表現する場面もしばしば見られます。回想法経験者からは「若返った気持ちになった」､「昔のことを思い出して楽しかった」などの感想が挙がっています。

こうした回想法を体験することによって､思い出を語ること､対話することの楽しさ､そして､語った内容を伝え残していくことの大切さを意識するようになります。同時に、地域の歴史、民俗を残していく必要性や子どもたちに伝承しておきたい話があることにも気づくでしょう。

回想法の終盤では、伝承の意義を考えることや､「ふるさと伝承推進員」として語り部となる意識づくりも欠かせません。修了された方に対して「ふるさと伝承推進員任命書」（資料 p.42 参照）などを発行することにより、高齢者の意欲が高まります。

（３）交流会の企画への流れ

「ふるさと伝承推進員」の活躍の場として子どもたちとの交流会を行うためには、地域の高齢

者、老人会、町内会、教育関係者（学校の先生など)、自治体職員、社会福祉協議会職員、民生委員、介護保険事業者、地域包括支援センターなど、多岐にわたる協力者が必要になります。

イベント開催の中心となる４～５名が運営委員となり、その他の方はイベントを支える縁の下の力持ち、サポーターとして活躍していただきます。イベントが円滑に行われるように充分に計画を練る必要があるため、事前に運営委員とサポーターによる運営会議を開催し、

・参加者、及び、地域への周知方法
・内容についての検討
・開催における役割分担
・開催までのスケジュール

などを中心に話し合います。運営会議は必要に応じて開催しますが、会議参加者の負担にならないように、あらかじめ開催日程を決めておくのも一案です。なお、イベント終了後に総括会議（振り返り）を行うと，次回以降に生かすことができます。

運営会議で検討した内容や「ふるさと伝承推進員」から得た情報などを基にして、実際にどのような交流会を開催するのかを話し合います。話し合いは「ふるさと伝承推進員」と運営委員を中心に、必要であれば、地域住民にも参加していただきましょう。開催日時の選定や参加者に声をかける方法など、地域を代表して参加している運営委員から意見を聞くことが大切です。

また、「ふるさと伝承推進員」の方々に担当していただく役割を、無理のない範囲で決めていきます。話をする方、実際の作業をする方、お祭りの謡いや踊りをする方など、一人ひとりのスキルを活かして役割分担を決めていきます。

特に、伝統行事やお祭りなど、地域の特性を伝える場合には、昔使った道具などがあるとスムーズに運びます。そういった小道具探しも重要です。交流会で紹介する演目はリハーサルを行い、所要時間を測っておくのも一案です。

交流の相手である子どもたちは、質問が大好きです。尋ねられたことには、なるべく分かりやすい言葉で答えるように心がけましょう。踊ったり、道具を使ったりするときには、子どもたちに「一緒にやりましょう」と声かけしてはいかがですか。

開催場所については、暖かい季節であれば校庭などの野外も選択肢に挙げられますが、気候や天候に左右されない屋内の方が、より安心です。公民館や学校の体育館などを借りられるように、自治体に協力をお願いしましょう。

3章 ふるさと伝承交流会の企画のすすめ方

３章　ふるさと伝承交流会の企画のすすめ方

それでは、ふるさと伝承交流会を具体的にどのように企画していくのか、そのすすめ方を、ふるさと伝承交流会計画書①と②、ふるさと伝承交流会実施報告書の書き方とともに具体的に見ていきましょう。

（１）計画の立て方

【ふるさと伝承交流会計画書①】（資料ｐ.35　参照）

1. 参加人数・呼びかけ方

この交流会は誰を対象とするのか、つまり参加を呼びかける世代、地域、団体と人数の規模を話し合い、企画をすすめていきます。そこで、対象となる子供世代とその親世代、高齢者世代それぞれの人数と、合計人数を記しましょう。また、それぞれどのように参加を呼びかけるのか、広報の仕方、周知の方法を検討し記しましょう。

2. 目的・目標

そもそも、この交流会は何を目的とするのか、ここまで書かれてあることを参考にしながら、企画をする運営委員（ふるさと伝承推進員）の思い、交流会のねらいを話し合い記しましょう。子供世代、親世代と高齢者世代が楽しく交流することはもちろんですが、子供たちに何を伝えたいのか、ふるさとの何を伝承していこうとするのか、をしっかり話し合ってください。また、ふるさと再生やまちづくりの観点から、どのような場、拠点をつくっていくのか、どのような活動の継続を図るのか、ということも考えてください。そこから内容の検討にすすみます。

3. 運営委員（役割分担）

運営委員（ふるさと伝承推進員）の方の名前を記しましょう。その中でリーダー､財務（会計）係、書記（記録）係など大まかな役割分担も決めておきましょう。

4. 開催日時

子供たちが集まりやすい時期､曜日､開始時刻､終了時刻､集中できる時間を検討し記しましょう。なお２回、３回とシリーズで実施する企画もよろしいかと思います。その場合は後に述べますが、１回実施する毎に反省会を行い、次回の企画に生かすよう計画の再検討を行うとよいでしょう。

5. 開催場所・隊形

開催場所を決め、どのような隊形で行うのか、参加者とスタッフの立ち（座り）位置、設備･備品の配置などがわかるよう見取り図を記しましょう。隊形の移動があれば何パターンか想定し記しておきましょう。顔の向きもわかるように人のマークを記しましょう。

6. 活動内容（役割分担）

先に立てた目的・目標を達成できるよう、それに沿った活動内容を検討、選択し、時間配分を考慮しながら開始から終了までの大まかなスケジュールを立てましょう。例えば、昔から伝わる不思議なお話や紙芝居、昔の遊びの実演、遊び道具作り、遊び体験、季節の行事や地域の伝統芸能、風習などの体験、昔のおやつ作りと会食、昔クイズ、感想インタビューなどなど。また、その際の役割分担も決めておきましょう。例えば、進行役・司会、各活動の責任者、備品設置・移動・準備役、語り部、実演者、作成指導担当、音響・照明係、写真係など。

7. 準備品（調達方法・役割分担）

活動に必要な設備・備品・材料とその調達方法、調達の責任者を検討し記しましょう。

8. 事前準備（役割分担）

開催場所の下見や活動に必要な設備・備品・材料、特に手作りの備品や材料があれば事前準備の役割分担とともに、準備日時のスケジュールを立てておく必要があります。また、ふるさと伝承交流会を宣伝するためのチラシやポスターを作成するのもよいですね。今後の活動に向けて交流会参加者に感想などアンケートを実施する場合は、その作成、印刷といった準備もあるかと思います。

なお、交流会の準備を通して、ふるさと伝承推進員や運営委員同士が交流する機会をつくることもできます。改めて回想法を体験することによって、子供たちに何を伝えたいのか、伝承の目的や交流会のねらいが見えてくることもあるでしょう。

9. 経費（予算）

場所を借りたり、活動に必要な設備・備品・材料を調達したりするために費用がかかる場合、お弁当やお菓子、飲み物などを準備する場合は、その経費を検討し、予算を立てておく必要があります。費用の捻出に関しては、所属団体の活動費を充てることができればよいのですが、初めての場合は、利用できる地域の市民活動助成事業などを事前に調べ年度初めに申請をしておいたり、あるいは参加費を設定したりすることも検討してみてください。参加費を設定する場合は計画書に記することはもちろんのこと、呼びかけの際にも忘れずに明示し伝えましょう。

10. 反省会

当日終了後に企画を担当した運営委員（ふるさと伝承推進員）および当日のスタッフで反省会を開きましょう。別の日に反省会をもつ場合には、日時と開催場所を明記しておきましょう。アンケートの回収結果を参考にできるとよいですね。なお、この反省会は交流会を継続するうえでも、ふるさと再生やまちづくりといった目的を推進するうえでも重要です。特に『ふるさと伝承推進員』の新たな任命や、特別参加の高齢の『語り部』に感謝状を渡し表彰する機会としても大いに活用してください。反省会の記録も忘れずに残しておきましょう。大勢で運営する場合は、運営委員や、ふるさと伝承推進員自らに向けたアンケートを準備しておき、反省会で書き込んでもらうようにするとよいと思います。

【ふるさと伝承交流会計画書②】（資料ｐ.36　参照）

これは、計画書①の６．活動内容をより詳細に検討しながら記載し、進行のスケジュール表として、また当日の最終確認や準備 OK かどうかのチェックリストとして活用するために用います。当日、スタッフ全員がこれを印刷した用紙を持っておかれることをおすすめします。

1. 当日のスタッフ（役割分担）

当日の運営委員（ふるさと伝承推進員）の名前と役割分担を記しましょう。当日、集合した際の出席チェックと役割の確認にも活用できます。

2. 当日の集合時間・準備品・準備内容

当日の集合時間を明記しましょう。

準備品をすべて挙げ､どこにどのように設置するのか､役割分担とともに記しましょう｡チェックリスト式にしておき、準備が完了したものからチェックしていけるようにするとよいでしょう。

3. スケジュール（役割分担）

計画書①の６．活動内容をもとに、それぞれの時間配分を十分に検討し、左側に時間を記入します。そのタイムスケジュールに沿って､受付から始まりの挨拶､各活動､感想インタビュー、終わりの挨拶、片付け、そして反省会の順で記入します。進行役がわかりやすいように作成しましょう。

計画書①の５．開催場所・隊形で書いた隊形と設備・備品の配置などがわかる見取り図も、空きスペースに書き写しておくと便利でしょう。

【ふるさと伝承交流会実施報告書】（資料ｐ.37　参照）

これは、交流会を実施した後に反省会で話し合いながら、計画通りにすすめられたのかどうかを振り返り、実際に行ったとおり、特に変更箇所を確認し記録しておくものです。また、参加者や運営委員（ふるさと伝承推進員）のアンケート結果や聞き取った感想などを記録します。反省会とこの報告書作成は､次回の企画に生かすことはもちろん､ふるさと伝承交流会の意義と、ふるさと伝承推進員の役割を再認識していただくための重要な手順なのです。

1.参加人数

実際に参加した子供世代、その親世代、高齢者世代それぞれの人数と、合計人数を記しましょう。

2.当日のスタッフ

実際に参加した運営委員（ふるさと伝承推進員）の名前を記しましょう。

3. 開催日時・開催場所

実施したとおり記しましょう。変更があればその理由を確認し書いておきましょう。

4. 実施内容

実施したとおり記しましょう。時間や内容、隊形などの変更点があればその理由を確認し書いておきましょう。

5. 経費（決算）

実際にかかった経費を決算として記しましょう。予算と比較して書いておくと次回の参考になるかと思います。

6. 参加者の感想（アンケート結果）

子供世代とその親世代、運営委員（ふるさと伝承推進員）以外の高齢者世代に分けて、感想を聞いたりアンケートを実施したりしておくとよいでしょう。その結果を記します。

7. スタッフの感想・反省点・今後に向けて（アンケート結果）

運営委員（ふるさと伝承推進員）の感想や反省点、よかった点、特に今後に向けてもっと工夫するといい点を大いに話し合い、記録しておきましょう。きっと、よき財産になることでしょう。

（2）話し方・伝え方のコツ

ふるさと伝承交流会での司会者をはじめ、運営委員（ふるさと伝承推進員）が子供に向けて配慮すべき要点を示します。それは、子供にとって

よくわかるように

楽しくなるように

集中できるように

ためになるように

感動できるように

このようになるよう工夫することです。

そのためには、

1. 話は長くせず、ひとつひとつを細切れに分けて話そう
2. まず身近な話から、そして詳しい話、ちょっと難しい話へ広げよう
3. 思わず答えたくなる楽しいクイズを盛り込もう
4. 思わず笑ってしまう愉快な笑い話を盛り込もう
5. 大切なことを伝えたい時こそ短い言葉や一言で言い表そう

このように話すことがコツです。

そして何より、話ばかりでなく絵や紙芝居、写真スライド、ビデオ映像、音、実際のモノなどを活用し、子供に五感を通して体験してもらうことが一番です。ふるさと伝承交流会は、このような教材や視聴覚機材を準備し、体験を中心に企画することをおすすめします。

（3）体験、作品作りのコツ

あらかじめ、見本を作っておいて見せることはもちろん、作業工程に沿った作成途中の見本をいくつか用意しておき、工程毎にそれを見せながら手順を説明していくようにするとわかりよいでしょう。また、手順を画用紙や模造紙に絵を書いたり写真を貼ったりしたものを使って説明したり、それを壁や黒板などに掲示して子供たちに常に見せておくとよいでしょう。

年齢によっては難しい作業があったり、時間が足りなかったりする場合は、途中までの難しいところを仕上げた半完成品を人数分準備しておき、残りの仕上げを子供たちに行ってもらうよう工夫することも必要でしょう。

4章 ふるさと伝承交流会の実施例

４章　ふるさと伝承交流会の実施例

ふるさと伝承交流会の実施例を４事例、別紙計画書にて紹介します。

（1）Ａ老人クラブ・A町社会福祉協議会・A小学校

小正月蚕玉様祭りの再現

Ａ町の社会福祉協議会が橋渡しをしてくれたＡ老人クラブのメンバーが主体となり、Ａ小学校で実施したふるさと伝承交流会です。回想法の体験を行い、そこで語られたお蚕さんの話や竜がいたという伝承話を近隣の小学生に聞かせよう、と企画が挙がり、一度交流会体験として小学校に出向きました。社会福祉協議会職員の調整もあり小学校の受け入れもスムーズで、さらに年を明け、昔から町に伝わる小正月蚕玉様祭りを再現する企画を立て、再度小学校に出向いたのです。高齢者の話を聞き、教えてもらいながら作業をする小学生の素直さと、このような伝承とふれあいの大切さを再認識した老人クラブの方々の生き生きとした話し振りと表情が大変印象的でありました。

老人クラブメンバーと小学生

（2）B市、B市社会福祉協議会、B-NPO

Ｂ市山間部の限界集落と称される地域の高齢者に声をかけわざわざ集っていただき、Ｂ市社会福祉協議会およびB-NPOのスタッフとともに回想法を６回体験していただきました。そこで語られた不思議な思い出の中から、河童のガワ太郎の話、天狗の話、虫送りの行事の話を、紙芝居と、田んぼでの松明回しの実演、炭焼き小屋での撮影を交えDVDを作成しました。そして街の子ども会と学童に通う小学１年生から６年生、総勢24名にバスで山間部の公民館に集まってもらい、そのDVD鑑賞とお話、縄ない、わら細工による動物作り、椋の実を使った遊び、葉書きで作ったメンコ、お手玉、こうせん作りと会食、松明回しの実演を実施しました。子供たちは笑顔で積極的に体験し、高齢者の方々は一所懸命相手をされていました。高齢者の

方々は不思議な言い伝えを生き生きと語られ、松明回しも高齢とは思えない体力で実演してくださいました。忙しい山の暮らしの合間をぬって、本活動に時間を割いていただき、集落のあたりまえの日常と歴史を子供たちに伝える意義を感じていただけたようでした。

回想法体験の様子

昔の遊び・手作り体験（縄ない）

（3）C市ふるさと学習館

むかしマイスターと子供たちの交流イベント「この指とまれ！」（資料ｐ.40　参照）

Ｃ市の生涯学習課が「ふるさと学習館」の開設に併せて、高齢者と子供たちが互いの知識・経験・感動を共有することを目指し、ふるさと伝承回想法のモデル事業に取り組まれました。

以前より、民俗資料の使い方の指南役として「むかしマイスター」の養成講座を始められており、今回はその受講者を中心に３ヶ月間、計３回にわたり回想法講座を受講していただき、ふるさと伝承回想法の取り組みについて学んでいただきました。自ら回想法を体験することと、地域の高齢者を交え回想法リーダーを体験し、子供たちに伝承したいことを共に話し合うワークショップを行いました。その後ふるさと伝承交流会の企画を進め、「ふるさと学習館」の開所式をはさみ、交流会当日を迎えられました。

むかし遊びにチャレンジと題し、お手玉、お手玉作り、おはじきを体験するコーナー、屋外では竹馬作りから始まり竹馬、竹ぽっくりの体験も。暮らしの昔と題し、洗い張りの展示と実演を行い､子供たちも不思議そうに伸子針を刺す体験をしていました｡ちょっとむかしクイズ｢これなぁ～に？」では展示されている昔の道具を見ながら使い道を当てるクイズに挑戦、スタンプを押してもらうために子供たちも真剣に考えていました。これらのコーナーを回り体験をすると受付でもらったチャレンジカードにスタンプを押してもらえ、全部スタンプが埋まるとプレゼントがもらえるという、子供たちのチャレンジ意欲を高める工夫がなかなか効果的でした。

子供たちは１時間半この３つのコーナーを自由に回った後、旧家住宅資料館の座敷に全員集合して、教えのむかしと題し､「小豆洗い」の妖怪話と、専門ボランティアの方によるＣ市の民話紙芝居を 30 分見て聞いて、最後にアンケートに答えてプレゼントをもらい帰って行きました。

ふるさと学習館という社会資源をふんだんに使い､ふるさと伝承推進員や｢むかしマイスター」の方々が大いに学び、議論し合い、準備に準備を重ね、また地元のボランティアや高齢者も巻

き込みながら、子供世代とその親世代との一大交流イベントを成功させました。今後は、ふるさと学習館を拠点に伝承活動が定着し、昔マイスターの方々が大いに活躍され、そのネットワークを広げていくことが課題かと思います。

しんし張り

お手玉

（4）D高年大学 交流ふれあい学科

D高年大学交流ふれあい学科の学生30名の方々は、その学科の名前のとおり、小学校へ出向き、2年生総勢94人を相手に昔の遊び体験を企画し、実施されました。そのきっかけは講義科目の内、2回にわたる回想法体験講座がきっかけでした。自ら昔の子供のころの遊びを思い出し、教室で体を動かし、その勢いで楽しく企画を立て、小学生に伝授されました。1年間を通し、学科の仲間と学び気心も知れ、機動力もあり、とても司会上手、指導上手な方々でした。地元の小学生とのふれあいは、同学科の恒例行事となりました。もちろん、学科担当スタッフの方の学生への支援と、小学校との交渉が大きな鍵となっていたように思います。高齢者のやる気と「思い」、そして個性が上手に引き出され、交流会の実現に結びついた事例です。

交流会の風景①

交流会の風景②

5章 まとめ

5章　まとめ

地域の活力、『地域力』を高めていくことが『ふるさと伝承回想法』のねらいであることを示してまいりました。それは、高齢者にとって健康維持と社会的役割を担う機会となり、同時に子供を含めた若い世代にとっても学びの場となり、お互い交流することによって地域が活性化し、その結果、地域力が高まるものと考えているからです。

そのような意味において『ふるさと伝承交流会』という企画はたいへん有意義です。特に高齢者世代にとって、交流を通じて感じることは人それぞれではありますが、毎回新しい発見があります。「若返った。」「伝統行事を残したい。」「昔のことを伝えていくことは大切だ。」など、ふるさとの価値や自己の役割の再認識といったことが、その前向きな感想から伺えます。

あらためて考えてみますと、本来、『地域』というのはそういうものではないでしょうか。このような相互交流による学び合いによってこそ、『ふるさと』が生き生きと醸成されてきたのだといえます。『ふるさと伝承回想法』とは、地域においてこれまであたりまえに行われてきたけれど現代において失われつつある『井戸端会議』、『世代間交流』を復活させる手段であり、『高齢者の役割と尊厳』の復権を目指すものなのです。

そのためには、まず高齢者の方々自らが人生を振り返ることによって、大切なものを再発見し、ご自分たちのもつかけがえのない智恵を自覚し、ふるさとがもつ地域力を再認識していただくことが大切です。そして『ふるさと伝承推進員』として、自ら率先して語り部を務めていただき、また高齢者と子供たちをつなぐ大人世代とも協力しネットワークを広げながら、楽しい『ふるさと伝承交流会』を展開していただきたいと願っています。その連携の姿こそが、『地域力』といえるものなのでしょう。

資　料

ふるさと伝承交流会計画書①

団体名:＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 企画責任者:＿＿＿＿＿＿＿＿

参加人数	子供世代:　　（人） 親世代:　　（人） 高齢者世代:　　（人） 合計:　　（人）	個人・団体への呼びかけ方: → → →
目的 目標		
運営委員 （役割分担）		
開催日時	年　月　日（　）　:　～　:	
開催場所 隊形	開催場所:	
活動内容 （役割分担）		
準備品 （調達方法） （役割分担）		
事前準備 （役割分担）	計　（回） ①　月　日（　）　:　～　: ②　月　日（　）　:　～　: ③　月　日（　）　:　～　: ④　月　日（　）　:　～　: ⑤　月　日（　）　:　～　:	準備内容:
経費 （予算）		
反省会	月　日（　）　:　～　:　開催場所:	

ふるさと伝承交流会計画書②

団体名:＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 企画責任者:＿＿＿＿＿＿＿＿

当日スタッフ （役割分担）	
集合時間 準備品	年　月　日（　）＿＿:＿＿ □　□ □　□ □　□ □　□ □　□
スケジュール （役割分担） （隊形）	:　～受付 :　～開始～始まりの挨拶 :　～ :　～ :　～ :　～ :　～感想インタビュー :　～終わりの挨拶 :　～終了～片付け :　～反省会～　:

ふるさと伝承交流会実施報告書

団体名:＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　企画責任者:＿＿＿＿＿＿＿

参加人数	子供世代:　　　（人） 親世代:　　　（人） 高齢者世代:　　　（人） 合計:　　　（人）	
当日スタッフ		
開催日時 開催場所	年　月　日（　）　:　〜　: 開催場所:	
実施内容	:　〜受付 :　〜開始〜始まりの挨拶 :　〜 :　〜 :　〜 :　〜 :　〜感想インタビュー :　〜終わりの挨拶 :　〜終了〜片付け	
経費 （決算）	（予算）	（決算）
参加者の感想	子供世代: 親世代: 高齢者世代:	
スタッフの感想 反省点 今後に向けて	感想： 反省点： 今後に向けて：	

ふるさと伝承交流会計画書①

団体名：A老人クラブ・A町社会福祉協議会・A小学校　　企画責任者：A町社会福祉協議会職員
A老人クラブ会長

参加人数	子供世代：　24（人） 親世代：　2（人） 高齢者世代：　19（人） 合計：　45（人）	個人・団体への呼びかけ方： →A小学校４年生 →A小学校４年担任・副担任 →A老人クラブの有志
目的 目標	かつてA町の産業の中心であったお蚕様について、小学校 4 年生は総合学習の授業で学んでおり、当時のことが書かれた本を読んだり調べたり、実際に当時養蚕に使用した道具の使い方などの話を地域高齢者から聞いている。お蚕様を学ぶ一環として、昔から町に伝わる小正月蚕玉様祭りを再現することとなり、地域高齢者と子供世代の交流から、親世代を含んだ町全体の交流につなげていきたい。また、地域高齢者が子供世代と交流することで、昔の伝統を思い出し、伝えていくことによる、伝統文化の伝承ならびに介護予防効果を期待したい。	
運営委員 （役割分担）	A町社会福祉協議会職員２名 A老人クラブ役員数名 A小学校４年担任・副担任	
開催日時	2010 年 1 月 12 日（火）10:00～12:00	
開催場所 隊形	開催場所：地域の公民館	
活動内容 （役割分担）	1. 挨拶（5 分） 2. 小学校4年生は4グループに分かれ、各々A老人クラブ有志の方々よりお蚕玉作りを習い、実際に作ってみる。（60 分） ・分からないことはA老人クラブの方々にたずねる。 ・実際にお蚕玉を試食する。 3. お蚕玉を木に飾り付けする。（20 分） 4. 挨拶（5 分） 5. 後片付け　ほか（30 分） 役割分担： ・　お蚕玉作り：A老人クラブ有志が４グループに分かれて使用 ・　お蚕玉を飾る木を準備（会長、副会長、会計役が中心）	
準備品 （調達方法） （役割分担）	・　木は地区の山より自然のものを伐採 ・　お蚕玉を作る米粉・調理用品はA老人クラブ有志の方が持参	
事前準備 （役割分担）	計　2　（回）　　準備内容： ①　2009 年 11 月 14 日（土）10:00～12:00　回想法の体験 ②　2009 年 11 月 24 日（水）10:00～12:00　交流会体験学習（A小学校）	
経費 （予算）		
反省会	2010 年 1 月 12 日（火）12:00～13:00　開催場所：同公民館	

ふるさと伝承交流会計画書①

団体名:B市、B市社会福祉協議会、B-NPO　　企画責任者:B市、B市社協、B-NPO職員

参加人数	子供世代:　24(人) 親世代:　3(人) 高齢者世代:　5(人) 合計:　32(人)	個人・団体への呼びかけ方: →B学童クラブ、B子供会 →付き添い3名 →B地区地域高齢者
目的 目標	高齢者と交流を促進する子供向け映像教材を使用して地域高齢者と子供世代との交流を深めることを目的とする。 地域高齢者からその地域に伝わる不思議な話を聞き、昔の遊びや手作りおもちゃ作成、昔のおやつ体験などを通して、伝統文化の伝承につなげていくとともに、子供世代から親世代へと高齢者との交流が、世代間交流につながるようにしていきたい。	
運営委員 (役割分担)	行政・社協・NPOが企画運営 B市地区の高齢者が語り部	
開催日時	2008年11月15日(土)　11:00～15:00	
開催場所 隊形	・開催場所:B市地区草の根ハウス ・役割分担:推進員と親世代が中心となり、地区の高齢者と参加児童の交流がスムーズに運ぶように高齢者と推進員がペアになる。 あらかじめ地区の高齢者に協力を依頼し、当日は参加児童たちの先生役を務めていただく。	
活動内容 (役割分担)	1. はじめまして会　参加児童・スタッフの自己紹介　(30分) 2. 昼食(90分) 3. 昔の不思議なお話会、昔の遊び、地区の手作り体験(60分) 4. 昔のおやつ体験(45分) 5. さようなら会(参加児童が地域高齢者にお礼を述べる、15分)	
準備品 (調達方法) (役割分担)	・参加児童送迎用マイクロバス(レンタカー対応) ・高齢者と交流を促進する子供向け映像教材(NPOシルバー総合研究所制作) ・昔の遊び道具の材料(地区の高齢者対応) ・昔のおやつ体験(B－NPO対応)	
事前準備 (役割分担)	計　8　(回)　　準備内容: ①　2008年　7月19日(土)　10:00　～　12:00　回想法の体験 ②　2008年　8月18日(月)　10:00　～　11:00　回想法の体験 ③　2008年　8月31日(日)　15:00　～　17:00　回想法の体験 ④　2008年　9月14日(日)　15:00　～　17:00　回想法の体験 ⑤　2008年　9月27日(土)　14:30　～　15:30　回想法の体験 ⑥　2008年10月21日(土)　10:00　～　11:30　回想法の体験 ⑦　運営委員会による交流会の企画 ⑧　役割分担による活動の準備	
経費 (予算)		
反省会	2008年11月15日(土)　15:00～16:00　開催場所:同B市地区草の根ハウス	

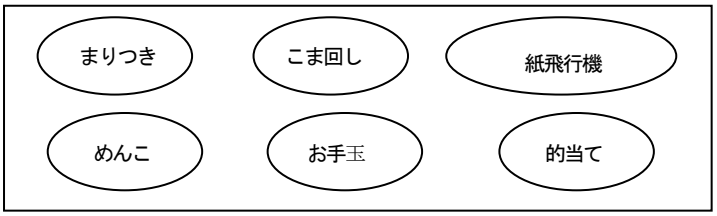
ふるさと伝承交流会計画書①

団体名: C 市ふるさと学習館、むかしマイスター(回想法講座修了者)　　企画責任者: 学習館職員

参加人数	子供世代: (人) 親世代: (人) 高齢者世代: 20(人) 合計: (人)	個人・団体への呼びかけ方: 市民向け広報誌にて呼びかける 市内小学校にチラシ 700 枚配布 ＊当日は合計 86 名参加
目的 目標	地域の歴史や伝承を高齢者が子供たちに伝えることを推進するモデル事業として実施し高齢者と子供たちが互いの知識・経験・感動を共有することを目指す。 また市民に向けたふるさと学習館の周知と共に、民俗資料の使い方の指南役「むかしマイスター」の活動の定着化を図る。	
運営委員 (役割分担)	昔マイスター(6 人) ボランティア(20 人) ふるさと伝承推進員(5 人)	
開催日時	2010 年 2 月 27 日 (土) 13:00～15:00	
開催場所 隊形	開催場所:ふるさと学習館	
活動内容 (役割分担)	C 市ふるさと学習館　高齢者と子供たちの交流事業「この指とまれ！」 参加者受付:この指とまれ！チャレンジカードを渡す むかし遊びにチャレンジ 1. 遊びのむかし(屋内)1F 学習室、13 時～14 時半、担当 4 人 お手玉、お手玉作り、おはじき＊チャレンジしたらスタンプをチャレンジカードに押す 2. 遊びのむかし(屋外)駐車場＊雨天時ふれあいルーム、13 時～14 時半、担当 4 人 竹馬、竹ぼっくり＊チャレンジしたらスタンプをチャレンジカードに押す 3. 暮らしのむかし　2F 研究室、13 時～14 時半、担当 3 人 洗い張り実演、ちょっとむかしクイズ「これなぁーに？」＊チャレンジカードにスタンプ 4. 教えのむかし　旧家住宅資料館上座敷・仏間、14 時半～15 時、担当:ボランティア 妖怪話と C 市の民話紙芝居 ＊民話紙芝居終了後参加者のチャレンジカードを確認し、スタンプ 4 個達成者に記念品をプレゼント	
準備品 (調達方法) (役割分担)	お手玉作り一式、おはじき、竹馬作り一式、民話紙芝居(ボランティア団体に協力依頼) ちょっとむかしクイズ「これなぁーに？」、チャレンジカード、スタンプ、プレゼント 広報誌原稿準備、チラシ作成と配布	
事前準備 (役割分担)	計 5(回)　　準備内容: ①10月25日 (日)13:30～15:30 回想法体験①、回想法に関する講義 ②11月 8日 (日)13:00～16:00 回想法体験②、ふるさと伝承回想法に関する講義 ③12月 6日 (日)13:00～16:00 回想法リーダー体験とワークショップ「子供たちに伝えたいこと」 ④ 1月23日 (土)13:00～16:00 ふるさと伝承交流会の企画、役割分担 ⑤ 2月20日 (土)13:00～16:00 ふるさと伝承交流会の準備、予行演習	
経費 (予算)		
反省会	2010 年 2 月 27 日 (土) 15:30～17:00 開催場所:ふるさと学習館1F 学習室	

ふるさと伝承交流会計画書①

団体名:D高年大学 交流ふれあい学科　　企画責任者:D高年大学 交流ふれあい学科学生役員

参加人数	子供世代:　94(人) 親世代:　7(人) 高齢者世代:　30(人) 合計:　131(人)	個人・団体への呼びかけ方: →D小学校2年生約15名ずつ全6グループ →クラス担任の先生他、校長先生 →D高年大学 交流ふれあい学科全学生
目的 目標	高齢者世代として回想法を体験し、子供世代に伝えたいこと、体験させたいことを検討した後、児童とふれあい、高齢者世代の役割を考えること。 子供たちと一緒に昔のなつかしい遊びを楽しみながら交流する。	
運営委員 (役割分担)	D高年大学 交流ふれあい学科学生役員 D高年大学 交流ふれあい学科担当スタッフ(小学校との調整役) NPOスタッフ(回想法リーダー役)	
開催日時	2009年7月10日(土)　10:55～12:20	
開催場所 隊形	D小学校体育館 	
活動内容 (役割分担)	1. 挨拶・自己紹介(5分) 2. 昔遊びクイズ「これなーんだ？クイズ」(5分) ＊昔の遊び道具, 生活用品を見せ何に使ったか当てる(3択問題2, 3題) 3. 6コーナーに分かれた昔遊び体験(60分) ＊1コーナーに1種類, 児童は10分ずつローテーション6か所 4. 紙飛行機飛ばしっこ競争(10分) 5. 児童の感想と高年大学生の感想を聞く(5分) 司会:○氏、紙飛行機作りコーナー責任者:○氏、こま回しコーナー責任者:○氏 まりつきコーナー責任者:○氏、めんこコーナー責任者:○氏、 お手玉コーナー責任者:○氏、的当てコーナー責任者:○氏	
準備品 (調達方法) (役割分担)	紙飛行機用クラフト紙:100枚、こま:15、まり:15、めんこ:100枚、 お手玉:15セット、的当て小道具:一式	
事前準備 (役割分担)	計 3(回)　　準備内容: ①　2009年6月　6日(土)13:00～15:00　　回想法の体験① ③　2009年6月13日(土)13:00～15:00　　回想法の体験② ＊「子供たちに伝えたいことは何ですか？」アンケートの実施 ④　2009年6月27日(土)13:00～15:00 :交流会の企画, 役割分担, 準備の打ち合わせ～責任者を中心に仲間で準備	
経費 (予算)		
反省会	2009年7月10日(土)14:00～15:00　開催場所:D高年大学教室	

ふるさと伝承推進員

シルバー太郎 殿

あなたを「ふるさと伝承推進員」
に任命します

平成　年　月　日

NPOシルバー総合研究所 理事長　来島 修志

著者紹介

市橋芳則（いちはし よしのり）

北名古屋市歴史民俗資料館、昭和日常博物館　学芸員
南山大学大学院文学研究科文化人類学専攻博士前期課程修了。北名古屋市歴史民俗資料館学芸員。南山大学非常勤講師。著書『昭和路地裏大博覧会』『キャラメルの値段』など。
（執筆部分　１章および２章）

来島修志（きじま　しゅうじ）

日本福祉大学健康科学部リハビリテーション学科作業療法学専攻　助教
NPOシルバー総合研究所　理事長
認知症高齢者に対する作業療法および回想法の研究・実践を通し、認知症関連や回想法関連の研修講師、認知症の人と家族の会の家族支援プログラムに協力をしている。またNPO活動を通し、北名古屋市を中心とした地域住民の方々や専門職に向けて回想法の普及、啓発事業に取り組んでいる。
（執筆部分　１章　表　回想法の多様性とふるさと伝承回想法の位置づけ、および３章、４章、５章）

編集

桑野康一　NPOシルバー総合研究所　常務理事

ビデオ制作

㈱シルバーチャンネル

ふるさと伝承回想法のススメ

～世代間交流で地域に活力を！～

平成23年１月

ＮＰＯシルバー総合研究所

〒105-0013 東京都港区浜松町1-12-5-3F
電話　03-5425-2383
FAX　03-5405-1184